

世界中の「立ち位置」を考える



伊藤製作所社長

伊藤 澄夫氏

割強だった。フィリピンには現地法人があり、従業員は102人。これまでに多くの経験を重ね、人材力も技術レベルも高

「なぜ、フィリピンに

「人材」に投資、海外と連携

「フィリピンにプレス加工などで生産進出して14年。日本金型工業会での国際委員長を務めており、海外進出の相談を受けることも増えていま

「当社が金型メーカー」といっても、日本の生産額の9割超は自動車や電機などのプレス部品加工。10年前まで金型が3

まっており、現地法人は進出したのですか。数年内には無借金経営に転じる。当社グループ内

「野産業が必要とされている。同国で使われる金型の7割は輸入に頼らざるを得ない状況にあり、日本企業にはチャンス。ただ、日本の拠点の従業員が約75人の当社では海外人材が足りず、フィリピン現法に絞って働きを

「私には海外で起業するという夢があったから語学も交渉も苦ではない。フィリピンでは信頼する日本人責任者が急逝した時とても辛く、撤退も考えた。しかし明るくまじめな社員に支えられ乗り切ってきた。日本でもフィリピンでも昨年未、社員が予想する以上のボーナスを出すことができた。社員の意欲が高まり国際規格が取得でき、顧客の信用を勝ち取れるのであれば、小さくても自身の濃い会社が優位。そうあり続けられるよう頑張りたい」

2011年 日本企業のモノづくり

田高やアジア勢の追い上げにより、日本のモノづくりを取り巻く環境が大きく変化している。グローバル化の中で日本にはどんなモノづくりを行い、海外企業との連携あるいは差別化をどう図るべきか。理化学研究所脳科学研究センター理研BSIトヨタ連携センター長の木村英紀氏、伊藤製作所(三重県四日市市)社長の伊藤澄夫氏、作家・元旋盤工の小関智弘氏に現状への認識と今後のあるべき姿を聞いた。

(編集委員・山中久仁昭)

